

教育相談と カウンセリング

子どもの発達理解を基盤として

金子智栄子

[編著]

大芦 治

金子功一

金子智昭

鈴木公基

松尾直博

吉村真理子

[著]

樹村房

はじめに

2016(平成28)年度の教育職員免許法改正に伴い、教員養成課程はコアカリキュラムとして大幅な再編成が求められることになった。2019(平成31)年度の本格的実施に向けて、従来の「教科に関する科目」「教職に関する科目」「教科又は教職に関する科目」の3区分が廃止され、教科・教職に関する科目の分断と細分化が改善された。ただし、『教育相談』は改正前とあまり変わることなく、「教育相談(カウンセリングに関する基礎的な知識を含む)の理論や方法」として幼稚園から高等学校に至るまでの免許取得に必要な重要な科目となっている。実際に、2007(平成19)年における文部科学省の報告(「児童生徒の教育相談の充実について—生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり—(報告)」平成19年7月 教育相談等に関する調査研究協力者会議)では、教育相談は学校における基盤的な機能で、教員一人ひとりが教育相談に対する意識を高めることが大切であり、教員養成の段階から教育相談の在り方や方法を体系的に学ぶことが必要であると指摘されている。

教員免許状取得において「教育相談」は重要な科目であり、本書は「教育相談」のテキストとして企画されている。幼稚園から高等学校に至るまでの教員養成課程はもちろん、保育士養成課程においても適用できるよう構成してある。序章では教育相談とカウンセリングの相違性を踏まえ、1章と2章ではカウンセリングと発達に関する基礎的な知識を得て、3章から4章で乳児期から青年期さらにそれ以降の発達の特徴を知り、その発達期ゆえに特に生じやすい問題行動にいかに対応するかを理解できるようにした。さらに、5章では障害児への理解と教育的援助、6章では子ども理解のためのアセスメントについて詳細に述べた。特に7章では活用できる社会的サポート資源を紹介し、その資源を生み出した政策つまり社会的背景をも明らかにした。

つまり、カウンセリングに関する基礎的な知識や技法、発達期特有の問題行動とその対応、特別支援、アセスメント、社会的資源への理解と活用というさ

さまざまな観点で教育相談を捉えているところに本書の特徴がある。教職課程の再編においてコアカリキュラムが強調されているように、カウンセリング論・発達心理学・臨床心理学・特別支援教育・測定と評価・ソーシャルワークなどという多種の科目を包括しているところに、本書の有用性があると著者一同自負している。

なお、子どもの発達理解を踏まえた「カウンセリング」に関するテキストは、『子どもの発達理解とカウンセリング』と称して、2006年に初版が発行され、今日まで一定の評価を得てきた。しかし、約10年の月日が流れ、データ・制度・用語などを修正する必要性が出てきており、このたび新しいテキスト「教育相談とカウンセリング—子どもの発達理解を基盤にして—」として名称新たにリニューアルすることにした。

著者一同、乳幼児から中学・高校生までをも対象とする保育者・教育者の養成課程で、本書が広く活用されることを願っている。

最後に、本書の企画から出版に至るまで格別の激励とご支援をくださった樹村房の大塚栄一氏に深い感謝をささげたい。

2018年2月

編著者 金子智栄子

【本書の執筆分担】

序章 金子智栄子	4章 大芦 治
1章 鈴木 公基	5章 松尾 直博
2章 金子 智昭	6章 金子智栄子
3章 吉村真理子	7章 金子 功一

教育相談とカウンセリング = もくじ

はじめに

序章 教育相談の意義と捉え方	1
(1) 教育相談の重要性	1
(2) 教育相談とカウンセリング	3
(3) 教育相談での機能的な連携	4
1 章 教育相談とカウンセリング	7
1. カウンセリングとは何か	7
(1) カウンセリングの基本的な考え方	7
(2) カウンセリングの対象と効果	8
(3) カウンセリングのプロセス	11
2. カウンセリングの諸理論	14
(1) 精神分析理論	14
(2) ユング心理学のアプローチ	16
(3) クライアント中心療法のアプローチ	18
(4) 認知行動療法的アプローチ	21
(5) 家族療法的アプローチ	24
(6) 遊戯療法的アプローチ	25
3. 教育相談におけるカウンセリング	27
(1) 教育相談における3段階の支援と子どもの発達促進	27
(2) 教育相談におけるカウンセラーとの連携	29
(3) 教師によるカウンセリング	31
2 章 心の成長を支える発達	33
1. 認知の発達	34

(1) ピアジェの発達理論	34
(2) 記憶	38
2. 自己の発達	40
(1) 自己概念	41
(2) 自己意識	42
(3) アイデンティティ	42
3. 感情の発達	45
(1) 子どもの感情	46
(2) 教育者の感情が子どもを伸ばす	48
4. 社会性の発達	50
(1) 愛着	50
(2) 友人関係の発達と特徴	54
3 章 小学生までの発達と教育相談	57
1. 乳児期の不適応とその特徴	58
(1) 乳児期の発達的特徴	58
(2) 乳児期の発達課題	59
(3) 乳児期の問題行動	59
2. 幼児期の不適応とその特徴	64
(1) 幼児期の発達的特徴	64
(2) 幼児期の発達課題	64
(3) 幼児期の問題行動	64
3. 児童期の不適応とその特徴	73
(1) 児童期の発達的特徴	73
(2) 児童期の発達課題	73
(3) 児童期の問題行動	74

4 章 中学・高校生までの発達と教育相談	79
1. 青年期，思春期とは	79
(1) 青年期，思春期という時期	79
(2) 第二次性徴と思春期	79
(3) 心理的な発達に伴う不安や動揺	81
2. 青年心理学の誕生	82
(1) 青年期の発見	82
(2) ホールと青年心理学の成立	83
3. 青年期の発達課題	84
(1) 発達課題とは	84
(2) ハヴィガーストの発達課題	84
4. 思春期から青年期に生ずるさまざまな不適応	86
(1) 発達課題と不適応	86
(2) 主な問題行動	86
(3) 思春期，青年期に発症する心の病	94
(4) 不適応に対応するにあたって	101
 5 章 特別支援教育とカウンセリング	 105
1. 「障害」と「特別な教育的ニーズ」の考え方	105
2. 発達障害の理解	107
(1) 学習障害	107
(2) 注意欠陥多動性障害	109
(3) 自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害	111
(4) その他の障害や疾患	115
3. 発達障害のある子どもへの支援	115
(1) 支援の基本的な考え方	115
(2) 学習の問題	117
(3) 集中力・多動性・衝動性の問題	118
(4) 社会性・コミュニケーションの問題	119

(5) 心身の不調の問題	120
(6) 校内体制の整備	121
4. 保護者への支援	122
(1) 保護者支援の重要性	122
(2) 子どもの発達と保護者の心情	123
(3) 多角的な保護者支援	126
6章 アセスメントとその活用	129
1. アセスメントとは何か	130
(1) 心理測定と心理アセスメント	130
(2) 的確なアセスメントをするために	131
2. アセスメントの種類	131
(1) 行動観察によるアセスメント	131
(2) 面接によるアセスメント	134
(3) 心理検査を用いたアセスメント	136
3. アセスメントの活用	153
(1) 包括的アセスメント	153
(2) アセスメントを実施する条件	154
7章 教育相談に生かす地域サポート資源	157
1. 地域サポート資源を支える制度について	157
(1) これまでの少子化対策について	158
(2) 子ども・子育てビジョン	160
(3) 少子化社会対策大綱	160
(4) 子ども・子育て支援新制度	161
2. 家庭での子育てサポート体制	164
(1) 妊娠・出産・育児のサポート体制	165
(2) 育児不安への対応	166
3. 幼稚園や保育所、幼保連携型認定こども園が担うサポート体制	167

(1) 地域子育て支援センターとしての役割	167
(2) 気になる子へのサポート支援	170
4. 小学校・中学校が主に担うサポート体制	171
(1) スクールカウンセラー	172
(2) スクールソーシャルワーカー	172
(3) 特別支援教育コーディネーター	173
5. 高等学校・大学が主に担うサポート体制	174
(1) 高等学校におけるキャリア教育	174
(2) 大学におけるキャリア教育	176
引用・参考文献	177
さくいん	183

序 章

教育相談の意義と捉え方

(1) 教育相談の重要性

現代社会は、いじめ、不登校、自殺、発達障害、少年犯罪の低年齢化、ネット犯罪の増加、児童虐待、家庭の養育力や教育力の低下など、多くの教育問題を抱えており、それらは学校教育上の課題ともなっている。さらに、児童生徒は、学業成績や進路、部活動などをはじめとして、友人・異性・家族などのさまざまな人間関係においても、一人ひとりが異なる悩みやストレスを抱えている。児童生徒の抱える悩みは、大人の場合と異なり、自ら解決しにくく、虐待など自らの責任に起因しないものも多い。このため、児童生徒の悩みやストレスに対して、適切かつ迅速に対応できるように教師各自が教育相談の理論や方法を獲得していることが必要である。それは、児童生徒が安心して学習に取り組む心理的環境を形成するためにも欠かせないことと考える。

教育相談はことばを媒介にするため、自分の気持ちをことばで表現できるようになる小学生以上が対象となりやすい。教育相談に関するテキストは、青年期(思春期)以降を対象にしたものが多いようである。しかし、乳幼児の愛着形成が青年期の対人関係に影響を与えるなど、発達には関連性や連続性がある。対象者を的確に理解するためには、対象者が発達段階に沿って適切な経験をし、発達課題を順調にこなしているかを推察する必要がある。したがって、児童期はもちろんのこと青年期以降を対象にした教育相談においても、発達の過程への知識や視点を持つことは重要である。

近年、幼稚園教育においても教育相談の重要性が高まっている。それは、少子化など子どもを取り巻く環境の急変に対応すべく、幼稚園の機能や役割が、通常の保育の充実に加えてさらに一層広がっているからである。地域においては、子育て家庭における保護者の負担、不安や孤立感の増加など、養育機能の変化に伴う子育て支援が求められている。2002(平成14)年における文部科学省の幼稚園教員の資質向上に関する調査の報告においても、幼稚園教員に求められる専門性のひとつとして「保護者及び地域社会との関係を構築する力」が挙げられており、「幼稚園は、通常教育活动や園児の保護者への対応やPTA活動の場だけではなく、地域の幼児教育のセンターとしての機能を発揮し、未就園児の親子登園、子育て相談、園開放、子育て情報の提供など子育て支援活動を展開することが求められている。このような局面で、園長や教員は、カウンセリングマインドをもち、保護者たちの悩みを受け止め、円滑にコミュニケーションをとることが求められている。」とある。

一方、保育士においても、1999(平成11)年に改訂された保育所保育指針では、子どもを取り巻く環境の急変に対応すべく、保育所の機能や役割が、通常の保育の充実に加えてさらに一層広がりがつつあることが明示された。地域においては、子育て家庭における保護者の負担、不安や孤立感の増加など、養育機能の変化に伴う子育て支援が求められるようになり、現在でも重要な機能となっている。さらに、2003(平成15)年11月に保育士資格が法定化され、児童福祉施設の任用資格から名称独占資格に改められた。保育士の国家資格化から、より一層保育者の専門性の理論的確立が求められ、保育士が専門家として保護者の相談にあたることが職務内容に組み込まれた。保育現場は乳幼児の不適応の改善に努めるだけでなく、保護者への指導や助言までも行わなければならないとなっている。特に育児相談においては、カウンセラーの姿勢や態度ばかりでなく、子どもの発達の姿を予想し把握して、どのように援助していけばよいのかを保護者に助言することが求められているのである。

(2) 教育相談とカウンセリング

教育相談の内容は、非行、いじめ、不登校、学業不振などから進学、受験にまで幅広い。担任面談や三者面談などの機会をつくり、児童生徒や保護者の相談に応じることが多い。しかし、実際には学校生活のさまざまな場面、つまり休憩時間、放課後、行事や授業など種々の場面を利用して相談が行われていることが多い。保育所や幼稚園では送迎のわずかな時間に教育相談や育児相談が行われているのを目の当たりにすることがある。臨床場面のカウンセリングが、1対1の閉鎖された特殊な空間の中で行われるのに対して、教育相談は日常生活の中で比較的オープンに行われていると考える。

また、学校教育は教育目標に向かって子どもの行動を変容させるねらいがある。そこで、カウンセリングマインドで有名なカール・ロジャーズの来談者中心療法を念頭に置くと、教師は聞き役で、自分からは積極的に提案しないという姿勢をとりやすい。しかし、学校現場での教育相談では、積極的に提案したり、時には褒めたり、しかったり、論したりすることも多い。カウンセリングの基礎的理論や技法は「教育相談」を行う上には必要であるが、心理臨床におけるカウンセリングと学校現場での教育相談とはかなりと異なると考える。

つまり教育相談を行うにあたって、発達の特徴を理解し、問題行動の状況や原因を把握し、対処方法を明確にする必要がある。その過程で、保護者などにアドバイスしたり、他の教師や保育者に援助を求めたり、教育センター・病院・福祉施設などの関連機関と連携したりすることもある。状況によっては、学校当局に働きかけること、子ども集団を組織し直すこともある。いわゆる面接室という個室内に限らず、教育や保育の現場さらにはその外にも行動範囲を広げなければならない。そこで、教育相談を充実させるには、カウンセリングの基礎理論や技術、発達に関する理解、教育技術はもちろんのこと、それだけではなくさまざまな学識と行動力が求められているのである。

(3) 教育相談での機能的な連携

近年の学校現場は、教師の通常業務に加えて特別支援教育や保護者対応などの新たな課題が山積し、教師の業務範囲が拡大している。このような多忙さが、教師のバーンアウトを生じさせる一因となっている。現在、教師の援助者として、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、特別支援教育コーディネーターなどがおり、それぞれの専門家と機能的な連携を取ることが、問題解決に繋がるばかりでなく、教師の精神的消耗感を低減すると考える。

スクールカウンセラーは、カウンセリングなどを通じて、子どもの不適応を解消すべく支援する心理の専門職である。スクールソーシャルワーカーは、制度や法律を活用して、子どもを取り巻く環境に働きかけて、家庭、学校、地域の橋渡しなどにより子どもの問題を解決すべく支援を行う者で、社会福祉の専門家である。特別支援教育コーディネーターは、校内や福祉、医療等の関係機関との間の連絡調整役として、あるいは、保護者に対する学校の窓口として、校内の関係者や関係機関との連携協力の強化を図る役割の教員である。そして、個別の教育支援計画を策定して、障害のある子どもを生涯にわたって支援する視点から、一人ひとりのニーズを把握して、教育・医療・福祉などの関係機関、保護者と連携して適切な教育的支援を効果的に行うように努めている。担任教師もしくは教育相談担当の教師は、各々の援助者が持つ専門性や機能の違いを十分に理解し、子どもの不適応解消のために連携することが重要である。

「連携の必要性」は、教育現場ではあらゆる場面で強調されており、それを否定する教師はいないと思う。しかし、一般的に教師は「連携が苦手」と思われている。つまり、教師は援助を求めにくいと言われているのである。筆者も、高等学校のスクールカウンセラーを5年間務めたことがあるが、問題が顕在化し深刻化してから相談にくるケースが見受けられた。教師の責任感の強さから一人で頑張ってしまう場合もあれば、連携したところ仕事が増えて大変

だったという失敗体験が基になっている場合もあった。

専門家と連携する場合には、その分野の基礎知識が必要である。スクールカウンセラーと連携するには、カウンセリングの基礎的な知識が求められる。たとえば、心理テストを行うのは心理の専門家であっても、どのようなテストか、あるいはその結果から何が読み取れるのかなど、ある程度の基礎的な知識がないと、報告書の内容が理解できないであろう。

教師や保育者は子どもと直接関わることから、問題行動を発見し支援の窓口となると考える。「変だな」という直感が大切である。子どもの不適応に気づき、専門家と協働して支援の機能的連携を形成し、未来ある子どもの将来を支えていてもらいたい。本書は「教育相談」を中核としてそれに関連する科目の基礎知識を網羅してある。本書にて学び、教育相談における有機的な連携を実現してほしいと願っている。

1

章

教育相談とカウンセリング

1. カウンセリングとは何か

(1) カウンセリングの基本的な考え方

1) カウンセリングの定義

最近では、私たちの生活でも多くの場面でカウンセリングということばが聞かれるようになった。もともとカウンセリング(counseling)には「助言、推奨、相談」などの意味がある。したがって、美容室で行われるカウンセリングや、かつらメーカーで行うカウンセリングもカウンセリングであることには違いない。このように、広義にはカウンセリングは相談活動一般を示すものである。

しかし、心理臨床におけるカウンセリングでは、心という観点からより限定的な位置づけがなされている。さまざまな定義が存在するものの、それらの共通点をまとめてみると次のようにいうことができる。すなわち、カウンセリングとは「自分一人ではうまく対処することができない問題によって悩んでいる人に対して、専門的な知識と経験を備えた人が、問題の解決が可能となるように援助すること」ということができるだろう。

このように、人が「解決したい」あるいは「どうにかしたい」などの満たされない気持ち(「悩み」)があるとき、より適切なやり方で心が満足できるよう、

専門家がさまざまな支援を行う過程がカウンセリングである。

2) カウンセリングとクライアント

カウンセリングは、自分の心の悩みについて相談をする人と、その相談を受ける専門家の二人がいて成り立つものである。この、相談を持ちかける人をクライアント(client)と呼び、相談を受ける専門家をカウンセラー(counselor)と呼ぶ。また、後に述べる心理療法などでは、心の問題について対処する専門家はセラピスト(therapist：治療者)、問題を抱えて来談する人を患者(patient)と呼ぶ場合もある。

3) カウンセリングと心理療法

カウンセリングとしばしば同じように使われることばとして、心理療法(psychotherapy)が挙げられる。最近では、カウンセリングと心理療法とを区別せずに使うことも多くなってきているが、両者を厳密に区別している専門家も少なくない。

カウンセリングはもともと進路指導の場面で用いられてきたことばであり、心理療法は精神医学の分野で用いられてきたことばという経緯がある。そのためカウンセリングには「教育」あるいは「開発」といった意味が多分に含まれている。それに対して医学の分野で発展してきた心理療法では「治療」の意味合いが大きい。このように、それぞれの対応の目標や内容の違いによって両者を区別する場合がある。

また、カウンセリングでは会話を中心とするやりとりが多いのに対して、心理療法では会話以外の方法が多く用いられることも多い。たとえば、具体的な思考や行動の記録を求める認知行動療法や、遊びを通して心の問題を改善していくとする遊戯療法などはカウンセリングとしてではなく心理療法として位置づけられることが多い。

(2) カウンセリングの対象と効果

人にカウンセリングを勧めると、「何を相談してよいかわからない」とか「カウンセリングをして意味があるの?」という返答を得ることも少なくな

い。カウンセリングがどのような悩みを対象としているのか、あるいは、カウンセリングにはどのような効果があるのか、ということについては十分に理解されていないことも多い。ここでは、カウンセリングにおいて対象となる悩みとカウンセリングの効果について述べる。

1) カウンセリングの対象となる悩み

人生において多くの人が持つ悩み 私たちが生まれてから死んでいくまでの間には、さまざまなことが起こる。進学や就職といった進路の問題から、親子関係、友人関係などの人間関係に至るまで悩みを持たない人はいないであろう。

このような悩みは、仲間などの身近な人に相談するなどの日常的な相互作用の中で解消されていくこともあれば、時間の経過とともに薄れていくものも多い。しかしながら、相談相手が身近に存在しない場合や時間が経過しても悩みが薄れない場合などはカウンセリングの対象となる。特に、悩みが持続的・慢性的である場合は、問題の背景に何らかの心的葛藤や悪循環が存在する場合が多いので、専門的なカウンセリングが必要となるだろう。

人生における特別な悩み 普通の生活では経験しないようなできごとに遭遇する人もいるだろう。たとえば、大きな災害で被害を受けたり、犯罪に巻き込まれたりした人たちである。そのような人は、強いストレスを感じトラウマ(心的外傷：trauma)と呼ばれる深い心の傷を負うことになる。トラウマはその人の後の生活に大きな障害をもたらし、日常生活の中だけではなかなか解消されないものとなる。

そのため、そのような経験をした人に対しては、心の傷を最小限にとどめ、できるだけ早くもとの生活に求められるような心理的な対応が必要となる。そのひとつとして、専門家によるカウンセリングや心理療法を受けることも重要となる。

心の病に伴う悩み 悩みをもつ人の中には、いわゆるノイローゼといわれるような症状を示す人もいる。たとえば、ほかの人と接触することに強い恐怖感を抱く人たち、あるいは、まわりのものが不潔に思えて日常生活が円滑にい

かないというような人たちである。これらの症状は神経症(neurosis)ともいわれ、本人は自分の症状を強く悩んでいることも多い。

したがって、これらの症状がみられる場合には、医師や心理カウンセラーに受診し、症状に対する診断(見立て)や対処について専門的な処置を受けることが必要である。適切な処置を受けない場合、症状が新たな困難を生み、その人の生活をより窮屈で不幸なものにしてしまうことにもなる。

以上、カウンセリングの対象となる3つの悩みのタイプを述べたが、カウンセリングが広まりつつある今日、ささいな不安や悩みであってもカウンセリングを受けることが生活の質(QOL)を向上させていくうえでも有効と言えるだろう。

2) カウンセリングの効果

ここでは、カウンセリングの効果について氏原(1999)を参考にしながらみていく。

カタルシス(catharsis) 人には必ずといってよいほど、他人に言えないことや言ってもわかってもらえないことがある。このようなことが多いほど、人の心は欲求不満の状態となり疲労していく。

そのようなとき、自分の話すことを否定せずに聴いてくれる人がいたら、多くの人は気持ちがおちになるのではないだろうか。なぜなら、うっ積した感情を自由に表現することによって、心の緊張がほぐれるからである。カウンセラーがクライアントの話に傾聴することによって得られる、このような効果はカタルシス(浄化)とよばれる。

心理の解明 多くの人が悩みを感じる場合、そこに何らかの不快な感情が存在するだろう。しかし、その不快な感情がどのようなものなのかということを理解するのは必ずしも容易ではない。たとえば、試験で不合格になったとき、その人の感じているのは「悲しみ」なのか「悔しさ」なのか意外とわからないものである。また、その感情がどのような原因で生じているのか、ということも考えてみると難しい。そのようなときに、クライアントの感情を明確にし、感情が生じる理由を探っていくのもカウンセリングの役割である。自分に

とって曖昧だったものがはっきりしていくと、その人の欲求不満は低まり心が安定してゆく。

教育 多くの人の悩みは、自分の人生をどのように生きていけばよいかということにつながっていくと言えるのではないだろうか。自分が人間らしく生きていくために、実際にどのように振る舞っていけばよいのか、それを自分一人で考えるのは辛く困難である。カウンセリングでは生き方を考える方法についてクライアントに教育するとともに、それについて一緒に考えていくことがある。そのことによってクライアントは、不安とうまく付き合いながら、自分の生き方について考えていくことができるようになる。

パーソナリティの変容 自分がうまくいかないという悩みを持ったときに、中には自分を変えたいと思う人もいるだろう。たとえば、自分が忘れてしまった思いを取り戻したいとか、素直でない自分を素直にしたいといったものである。ただし、そのような変化はその人のパーソナリティと深く関わる問題であり、一朝一夕で解決されるものではない。カウンセラーは、変化を求めるクライアントに対して方向性を見つけ、その努力を支援していく。このようにカウンセラーがクライアントと共に歩むパートナーとなることにより、人は徐々に自分のパーソナリティをより良い方向に変容させていくことができる。

(3) カウンセリングのプロセス

実際のカウンセリングにおいては、どのようにしてクライアントが変化していくのであろうか。多くのクライアントは、カウンセリングの中でいくつかの段階を経て適応的になっていく。ここでは、多くのカウンセリングに見られる一般的なプロセスについて説明する。

1) 導入期

カウンセリングは、まずクライアントが申し込みを行うところから始まる。申し込みを受けると、クライアントは受理面接(インテーク面接)を受けることとなる。ここで、主訴(どのようなことで悩んでいるか)、これまでの経過、家族構成などの基本的な情報が確認される。これらの情報を踏まえた上で、後の

引用・参考文献

■ 1 章

- Freud, S. 1917 *Introductory lectures on psychoanalysis*. The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud (Vol.16). London : Hogarth Press. 懸田克躬・高橋義孝(訳) 1971 フロイト著作集 1—精神分析入門— 人文書院
- 弘中正美 2014 遊戯療法と箱庭療法をめぐって 誠信書房
- 石隈利紀(編) 1999 学校心理学：教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 岩本隆茂・大野裕・坂野雄二(編) 1997 認知行動療法の理論と実際 培風館
- 金沢吉展 1998 カウンセラー—専門家としての条件— 誠信書房
- 河合隼雄 1977 無意識の構造(中公新書) 中央公論社
- 小林正幸(編) 1999 実践入門教育カウンセリング：学校で活かすカウンセリングの理論と技法 川島書店
- 前田重治 1985 図解精神分析学 誠信書房
- Rogers, C. R. 1951 A theory of personality and behavior. In *Client-centered Therapy*. Houghton Mifflin Co. 友田不二男(訳) 1967 パースナリティと行動についての一理論 伊藤博(編訳) パースナリティ理論 第4章, pp.89-162.
- Rogers, C. R. 1957 The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of psychology*, 21, 95-103. 伊藤博(訳) 1966 パースナリティ変化の必要にして十分な条件 伊藤博(編訳) サイコセラピーの過程 第6章, pp.117-140.
- 佐治守夫・飯長喜一郎 1983 ロジャーズ—クライエント中心療法 有斐閣
- 氏原寛 1999 カウンセリング 氏原寛・成田善弘(編) 臨床心理学①：カウンセリングと精神療法—心理治療— 培風館 pp.2-19.

■ 2 章

- Bakker, A.B. 2005 Flow among music teachers and their students : The crossover of peak experiences. *Journal of Vocational Behavior*, 66, 26-44.
- Benesse 教育総合研究所 2012 第2回大学生の学習・生活実態調査
- Collins, M.L. 1978 Effects of enthusiasm training on preservice elementary teachers. *Research in Teacher Education*, 29, 53-57.

[編著者]

金子智栄子 文京学院大学人間学部

[共著者] (五十音順)

大芦 治 千葉大学教育学部

金子 功一 植草学園大学発達教育学部

金子 智昭 埼玉純真短期大学

鈴木 公基 関東学院大学教育学部

松尾 直博 東京学芸大学教育学部

吉村真理子 千葉敬愛短期大学

イラスト／赤木 己恵

教育相談とカウンセリング 子どもの発達理解を基盤として

2018年3月26日 初版第1刷発行

2021年9月2日 初版第3刷

検印廃止

編著者◎ 金子 智栄子

発行者 大塚 栄一

発行所 株式会社 **樹村房**
JUSONBO

〒112-0002 東京都文京区小石川5丁目11番7号

電話 東京 (03) 3868-7321

FAX 東京 (03) 6801-5202

<https://www.jusonbo.co.jp/>

振替口座 00190-3-93169

印刷／亜細亜印刷株式会社 製本／有限会社愛千製本所
ISBN978-4-88367-296-7 乱丁・落丁本はお取り替えいたします。